



サイコロジーオブマジック(マジックの心理学)

THE PSYCHOLOGY OF MAGIC FROM LAB TO STAGE
BY ALICE PAILHES & GUSTAV KUHN

(訳注：この本はマジックを趣味とする2人の心理学者によって書かれたもので、マジックの解説書ではありません。

マジックと心理学との間を橋渡しして、マジックへの理解をより深めようとするものです。

ボリュームがあるので、この解説書もかなり「要約」したものとなっていますが、本書の大意は分かっていただけだと思いますし、マジシャンに興味があると思われる部分は取り込んであります。

例えば：

- ・「CROSS-CUT」フォースに「タイムミスディレクション」は必要である。
- ・「好きなカードを言ってください」が、客にとって一番「フリーでフェア」な選択の仕方である。
- ・「トリック」という言葉を使って、演目を紹介するのは良くない。

など、よく言われていることですが、果たして本当にそうでしょうか？

本書には興味深い科学的調査結果が出ています。

また、あまり知られていないフォースの解説などもありますので、楽しんでいただけたらと思います。

たまにはこうした本を読んで、いつも演じている自分のマジックを見直すのも良きかな、と思います)

目次

Introduction : 初めに

The Science of Magic Endeavour :マジックの科学的把握の努力

Magic Theory: Definitions and Taxonomies : 定義と分類

Blind Spots and How to Exploit Them : 盲点とその利用可能性

Visual Illusions : 視覚的錯覚

Memory Illusions : 記憶の錯覚

A Path of Least Resistance: Decision Forces : 最も抵抗の少ない道を選ぶ

Illusions of Control: Outcome Forces. : コントロールしているという錯覚

Framing Magic. : マジックの性格付け、枠組み

Why Do We Enjoy Magic? : 人はなぜマジックを楽しむのか?

Conclusion. : 結論

はじめに

長々と語るつもりは有りませんが、まずは自己紹介をさせてください。

私は GUSTAV KUHN です。12 歳でマジックと出会い、それにのめり込んで 10 代の間をマジックを学ぶことに費やしました。そうする中で、さらなるマジックの秘密の扉を開けるには心理学が必要な事、つまり人の心を理解することが必要な事に気づきました。そして、例えば JUAN TAMARIZ のように心理的な原理を自分の演技の中に組み込んでいる先人達がいたので、その足跡をたどれば良いと思っていました。当時私は多くの心理学の本を読み、デッキ 1 組を暗記する記憶法を覚え、人々のボディランゲージを読み取る方法を勉強していました。しかし、それらの本は怪しい科学をベースにしたものも多く、また厳密な心理学の本はマジシャンのために書かれたものではなく、その応用は困難でした。

20 歳の頃に、私はマジックの研究のレベルを上げるために、心理学コースに進みました。新しいサイコロジカルトリックを学べるかと期待したのですが、大学の 1 年目ではマジックに関係するものは何も得られずがっかりしました。しかし、次第に私の興味は心理学そのものにも向き始め、そのまま「人間の意識」をテーマにして博士課程に進みました。7 年に及ぶ研究の末に私は心理学を活かして私のマジックを発展させ、またマジックを活かして私の心理学の研究を進めることにしたのです。ロンドンの GOLDSMITHS 大学心理学科内に「MAGIC-LAB」(マジック研究所)を設けて責任者となって、フォースやミスディレクションその他の心の操作などについて研究を開始しました。他の科学者にも参加してもらい、マジックに係ることすべてを研究することになりましたが、さらにはそれが社会の福祉

や、サイバーセキュリティ等大切な分野にも役立つことを期待したのです。我々は多くの実験を行いました。その結果をマジック界にも報告したいと思ったのがこの本が出来るきっかけでした。

いまや、マジックの研究は世界中で科学的な1つのテーマとしていろいろな科学者が取り組んでいます。SOMA「SCIENCE OF MAGIC ASSOCIATION」という、科学者とマジシャンが一緒になってマジックとその根底にある人間心理を研究し、議論する機関も出来ました。我々の研究成果の中には、マジックの演技に重要な影響をもたらすものあり、それらを発表したいと考えていました。例えば共著者のALICEは「CROSS-CUT FORCE」について深く研究しましたし、往々にしてマジシャンの思いと観客の受け取り方の間にギャップがあることも分かりました。私は約20年にわたって、マジックを使って人の心を科学的に学んで来ましたが、そろそろ逆にマジックの演技をよりよくするために科学的成果を活かしても良い時だと思うのです。

共著者のALICEが私の指導の下に博士号を獲得してくれたのは嬉しい限りですが、彼女は私のマジックと科学に対する熱意に共感してくれて、この本を共同で執筆することになりました。では、彼女にバトンタッチします。

~~~~~

私はALICE PAILHESで、いつも人の「心」について興味を持ってきました。また小さい頃からマジックも好きでしたが、自分ではやりませんでした。約10年前にある心理学の授業で、「BARNUM」効果（人についての一般的な描写を、人々が自分自身の正確な描写だと思い込む現象）を学び、またそこでDARREN BROWNのメンタルマジックショーのビデオを見ました。私はショックを受け、他のDARREN BROWNのビデオも見て、マジックの魅力にあらためて取りつかれたのです。とりわけ、ビデオでみた催眠術やサイコロジカルサトルティーに興味を惹かれました。2年後には、人の選択に対する「巧妙な無意識の影響」について、マジックを通じて研究を開始し、マジック特に多くのフォースの方法を研究してきました。それから7年が経過し、その間に同じようにマジックに科学的な光をあてているGUSTAVを知り、彼の指導を受けるようになりました。彼の指導により私が博士号を取得出来た今、私をここまで引っ張ってくれたマジック界に我々の貴重な研究成果をマジシャンが使える形で還元することが恩返しだと思い、この本の共著者となりました。これまで多くのマジシャン達と会話をしてきましたが、中には私のマジックに対するアプローチを嫌う人もいました。しかし、大多数は私を受け入れてくれて協力的でした。多くのマジシャンと知り合えたことも、大きな財産となりました。

この本があなたにマジックについての新しい、刺激的な、より深い洞察をもたらし、楽しい読み物となってくれることを望んでやみません。

### ・この本は他の本とどう違うか？

マジックを教える本は無数にあります。単にやり方を教える本もありますが、TAMARIZ、ORTIZ、WONDERなどはその考え方、理論も教えており、マジックの豊かな歴史を作ってきました。彼らは自分の豊富な経験に基づいてマジックを語っており、どのトリックが使えるかを知っています。しかしながら、彼ら全員が必ずしも「どうしてそのトリックが使えるのか？」という点までは語っていません。

我々は本来心理学者という科学者であり、疑問には科学的手法をもって答えます。この本では、科学的手法をマジックに使います。約20年にわたって「LAB」でマジックを研究してきたなかで、マジックを支えている心理的な原理について多くを学びました。この本では新しいマジックについては教えませんが、マジックに大切な原理を心理学や科学的文献その他を証拠として使いながら、説明したいと思えます。ただ、マジックに関する科学は比較的新しい分野であり、まだよく分かっていないこともありま

す。長年マジシャン達が頭を悩ましてきた問題にも科学的回答が出せれば、と願っています。この本では、これまでマジック界の協力を得て行ったいろいろな実験の成果を報告させていただきます。

素晴らしい心理学の本も多数あり、それらも「どうしてあるトリックが使えるものであるのか」について多少の理解を促進してくれるかもしれませんが、それらはマジシャン向けに書かれたものではないのです。我々はこの本を、マジシャンのために書きました。我々のマジックと心理学というキャリアを背景に、「どうして脳は不可能を経験したかのように騙されるのか?」、「その時どのような感情が沸き上がるのか?」等を我々の「LAB」や友人の多くの「LAB」で研究した成果を載せています。この本があなたにマジックに対するより深い理解を与えられることを願っていますが、そうしたマジックの心理的なメカニズムを理解することで、あなたがより強力なマジックを創れることを期待するものです。

## ・この本から学ぶもの

**CHAPTER 1**—ここでは、マジックを科学的にとらえる努力の必要性について学びます。例えば、あなたの演技の評価を信頼出来るエビデンスによって行うことがなぜ重要なのか等について説明しますが、抽象論ではないので安心してください。

「マジックの科学」から得られた面白い情報も載せています。

**CHAPTER 2**—物事を改善するためにはその物を良く知らなければなりません、マジシャン達は「マジックとは何か?」が分かっているのでしょうか?

ここでは、まずマジックとは何か、人々はマジックをどう体験するのかについて考え、そこからミスディレクションやフォースの理論に進みます。

**CHAPTER 3**—これ以下の7つのCHAPTERでは、個別の異なる心理的原理がいかにマジックに應用されるかについて学びます。

大学の心理学コースとは違って、これらのCHAPTERの話題はマジックに関するものばかりです。そして、心理学と「マジックの科学」のリサーチによるエビデンスを基に話を進めます。

**CHAPTER 3**では、人間の「視覚的盲点」や「心の盲点」について学びます。

なぜそこにある物を見逃すのか、についてです。

**CHAPTER 4**では、人間の心がいかに「視覚的錯覚」に騙されるかについて学びます。

**CHAPTER 5**では、人間の記憶の働きについて学びます。「記憶」を操作してゆがめることは出来るのでしょうか?

(この後の2つのCHAPTERは、フォースに関するものです。ALICEの3年にわたる研究の成果です)

**CHAPTER 6**では、「DECISION FORCE」を扱います。客の選択そのものに影響を与えます。「サイコロジカルフォース」がこれにあたります。

**CHAPTER 7**では、「OUTCOME FORCE」を扱います。これは客にはフリーチョイスさせますが、結果は決まっているというフォースです。「CROSS-CUT」フォースや「EQUIVOQUE」などです。

**CHAPTER 8**では、マジックをどう「性格づけ」して演じるかが、客の受け取り方にどう影響するかを学びます。メンタリズム、マジックなど、どの枠に演目を入れるかの影響についてです。

CHAPTER 9では、マジックが呼び起こす感情について考え、「人はなぜマジックを楽しむのか？」を考えます。

この本はなるべく読みやすいようにと努力しましたが、それでも心理学の理論や学説、研究結果が盛りだくさんあります。あなたは一気に読み通すのは難しいかもしれません。慌てず、必要ならメモを取りながら CHAPTER ごとに読んで行くのが良いかもしれません。また、自分の興味のある CHAPTER から読んで行く手もありますが、我々としては「マジック」と「科学」の関係について論じた CHAPTER 1からスタートすることをお勧めします。ただし、CHAPTER 1はかなり内容が濃いので、放り出さないようにしてください。

なお、CHAPTER 2以外は、それぞれの経験に応じて GUSTAV と ALICE でそれぞれの CHAPTER を書きました。これは異例な書き方かもしれませんが、お互いがよく分かっている部分を担当する方が良いとの判断です。各 CHAPTER の始めにどちらが書いたかを分かるようにしています。

この本ではマジックトリックの解説もなく、通常マジックの本ではありません。その代わりに、マジックについての多くの調査・研究結果のサマリーが盛り込まれていますが、頁数の制限もありどうしても細部は省略せざるを得ません。もし、あなたが何か特に興味あるものがあったなら、そのオリジナルの科学文献やペーパーに当たってみることをお勧めします。

巻末に参考文献のリストを付けておきましたが、無料のものも有料のものもあります。でも科学者と言うのは、自分の意見・業績を他人に知ってもらいたい欲求があるので無料で資料を送ってくれるケースもあるでしょう。我々の「MAGIC-LAB」の資料はネットで無料でダウンロード出来ますし、他のビデオや有益な情報も含まれています (<https://www.magicresearchlab.com>)。

さあ、あなたはマジックと科学の魅惑の世界に浸る心の準備は出来ましたか？すべてが分かり易いものばかりではありませんが、きっとあなたの「マジック」と「人間の心」についての見方が変わるとお約束しましょう。

## CHAPTER 1

### マジックの科学的把握の努力

(GUSTAV) 人間はこの世について学び、それを行動に活かすことでこの地球上で発展してきました。人を月に飛ばし、ワクチンを開発し、さらには空の帽子からウサギまで取り出すようになったのです！これらは、まずアイデアを思いつき、それを実現する理論を構築し、合否の評価をし、実行するという何世代にもわたって行われてきた手順によるものです。

マジックも同じように長年にわたって進化してきました。非公式な実験と観察が繰り返され洗練されたものとなってきたのですが、それらは文献に書かれて何世代にもわたって受け継がれてきました。現代のマジシャン達はこうした先人の知識に負うところが大きいのです。ただ、人生の他の側面とマジックが違うところは、ファンタジー小説（ハリーポッター）の中の「HOGWARTS」のような公式な教育

機関が無いことです。我々は基本的には個々に本やレクチャーで学ばなければなりません。せいぜい仲間のマジシャンと話をする位でしょうか。正式なカリキュラムもないのに、マジックの知識は自然にマジック界に広がって行き、数々のトリックが世代を超えて伝えられて行きます。このプロセスはむしろ驚くべきものですが、科学的アプローチによりもう少し効率的にすることが出来るのではないのでしょうか？

このCHAPTERでは、その科学的アプローチについて説明したいと思います。それはあなたの独創性を奪おうとするものではなく、データに基づいてあなたのマジックを改善しより洗練したものにすることを助けようとするものです。まずはあなたの観客があなたのマジックをどう見ているのかについて考えます。自分が思っている通りに、客達は受け取っているのでしょうか？併せて、プレイングカードをフォースするより効果的なやり方についても考えます。

### • マジックを評価するツール

マジシャンも心理学者も、人の考えることと行動を予測し操る方法を長年考えて来ました。しかし、マジシャンの場合は心理学者ほどシステマティックではなく、往々にして自分のマジックに対する客の反応などをそっと観察して知識や経験を深めて行ったのです。個々の演技は、いわば非公式な実験のようなものだったのです。もし客の反応が良くなければ、やり方を変えて演じるという事を繰り返して、良い反応が得られるまで続けるという事になります。最終的に納得いくものが出来れば、それを他のマジシャンにもシェアすることもあるでしょう。心理学者は同じことをしますが、ステージではなくて「LAB」で行うのです。マジシャンとの主な違いは、心理学者はデータとそれがどう集められたかということに重きを置くという事でしょう。科学的進歩の鍵はいかに良いデータが集められるかであり、それには正確で信頼出来るソースが必要です。それは時には、「LAB」のようなしっかり管理された環境での実験でしか手に入らないものもあります。マジシャンはより強力なトリックを創ろうと努力しますが、そのためには人々がそのトリックを本当はどう思っているかを知る必要があります。人々の考えていることを探るのは簡単なことではなく、唯一の方法などありません。しかし、この150年に及ぶ心理学のリサーチは、いかにして人の頭の中を覗き見るかの方法の一端を我々に教えてくれるのです。そして、それらのツールは、客が本当はあなたのマジックをどう見ているかについての洞察力を与えてくれます。

### • マジックへの伝統的アプローチをいかにして進歩したものに変えるか

自分のマジックが良いのか悪いのかを、マジシャンは一般的にはどうやって知るのでしょうか？多くのプロフェッショナルマジシャンにインタビューした結果として、まずは鏡の前で演じてみたり、練習の演技を撮影したものを見たりしています。あるいは実際のライブ映像を見て、良い点・悪い点を書き出しています。また、友人のマジシャンからフィードバックを求めます。もっとも一般的なのは、実際の演技中の観客の反応を観察するというやり方です。それらは、あなたのマジックが良いのか悪いのかについて参考になるとは思いますが、必ずしも観客が本当はどのように見ているのかを教えてくれるとは限りません。

鏡や映像で自分のマジックを見ることも有益ではありますが、心理学の100年のリサーチによれば、自己チェックは当てにならないことが多いのです。たとえば、15頁の図を見てください。あなたには何に見えますか？初めは白と黒のドットが散らばっているかのように見えるかもしれませんが、私が「ダルメシアンがいる」と言ったら1匹の犬が現れるのではないのでしょうか？つまり、他の人が見ている物が見えないことがあるのです。

(訳注：この図は「DALMATIAN DOG」と言われる、心理学の教科書によく出て来る図です。ダルメシアンは図の右側中央に後ろ向きになっています。顔を地面に向けて、おしりを右手前に向けています)

人間の脳の働きの研究が進むにつれて、我々が認識する世界は人により異なるということが分かって来ました。あなたの認識はあなたの過去の経験により出来上がりますが、人の経験はすべて異なるので周りの世界も異なって認識されるのです。生まれた時から直線のデザインしかない環境で育てられた猫は、その他の方向の線を認識できなくなる(＝見えなくなる)のです。これは極端な例ですが、人間にも当てはまることなのです。また、人間の成長も認識の変化をもたらします。赤ちゃんと大人では、同じトリックでもまったく違って認識されるでしょう。自分自身のマジックをビデオで見た時のTHOMAS FRAPSと言うマジシャンの脳波と、同じものを見た一般客の脳波はまったく違う反応を示したという事実もあります。つまりは一般客のマジックの経験とマジシャンのそれとは、大きな違いがあるからです。マジシャンがあるマジックについてセルフチェックする場合、それは必ずしも信頼に足るものではないかもしれないのです。マジシャン本人には良いと思えるトリックであっても、一般客にはどうだか正確には分からないのです。

## 「知識の呪い」と自己中心的バイアスの影響—フォースのケース

「知識の呪い」とは、知識豊富なゆえに陥る専門的なバイアス(偏向)のことであり、相手も自分と同じ知識があると無意識のうちに思い込んでいることです。その分野に精通すればするほど、陥り易いもので、他の人の行動を予測する時などに間違いを起こしやすくなります。ある実験で、1人の人に25の良く知られた歌のリストの中からいくつかを選んで、手でテーブルをたたいて歌の旋律を表現してもらいました。他の人が聞いたら何曲くらい分かるかとの問いに、彼はかなりの高い割合を言いました。しかし、実際に別な人にリストを見せずに聞かせると、ほとんど分からなかったのです。手でたたいた人は、自分が何の曲を表現しているかが分かっているため、他の人も同じだと思い込んでしまうわけです。「知識の呪い」は、一般客がどうマジックを見ているかを知ることの難しさを説明してくれます。

さらに他人を客観的にとらえるのを難しくしている、他の要素もあります。マジシャンに関連したものとしては、「EGOCENTRIC BIAS」があります。「EGOCENTRIC BIAS(エゴセントリックバイアス)」は、良くも悪くも自分の行ったこと、行うことを過大に、自分中心に考える偏向性の事で、自己中心的バイアスと言われます。これは他人の物の見方が自分と違う時に、それを無視したり過小評価したりする行動に現れます。つまり無意識のうちに自己中心的に考えるわけで、これでは他人の状態を正しく掴めません。マジシャンが初めての新しいマジックを演じる時に感じる緊張などもそうであり、観客は新しいマジックかどうかは知らないのにそのことには思い至らず、「新しいマジックなのでより厳しい目で見てくるかもしれない」と自分中心の状況判断で相手のことを考える訳です。

この「エゴセントリックバイアス」は日々の生活のいろいろな面に影響するものですが、マジシャンがマジックを行う際にも影響します。マジシャン達にインタビュー調査した結果から分かった1例を挙げましょう。

マジシャンは客にカードを1枚取らせることが良くありますが、いろいろなやり方をします。デッキをスプレッドして1枚取らせたり、デッキをカットさせた所のカードを取らせたり、さらには口頭で言わせたりもします(20頁の図参照)。客から見たら、「なんでこんなにいろいろな方法でカードを選ばせ

るのだ」と言いたくなるでしょうが、すべては特定のカードを取らせるフォースのために考えられてきたやり方です。クラシックフォースやリフルフォースなど、あなたにもお気に入りのフォースがあると思いますが、これまでに約720種類ものフォーシングテクニックの文献が見られるのです。それらのフォーシングはそれぞれに特別なカードの選ばせ方をするのですが、マジシャンは結果の不思議さに重点を置いて考えますが、客がその選択プロセスをどう思っているかについてはあまり考えません。不思議なら良いだろうという「エゴセントリックスバイアス」が働くわけです。しかし、それこそ効果的なフォースを創るうえで考えるべきことなのです。カードを選んだ客が本当にフリーチョイスだと感じなければ、良いフォースとは言えません。

実際のフォースではいろいろな要素が影響します。フォースの名人であるDANI DAORTIZの場合は、彼の演技スタイルとカリスマ性が大きく、私にはまったく出来ません。そこまで行くと話は複雑になり私にはすべてを説明することは出来ませんが、ただ一つこれだけは押さえておきたいことはやはり、「客がそのフォースをフリーチョイスと感じるか？」という根本的な事です。それなくしては、いくらフォースのスライハンドに多くの時間をかけても無駄となります。

多くの先人たちによって多くのフォースのやり方が残されて、我々はその中から自分が良いと思ったものを選びます。しかし、その特別なやり方でカードを選ばせた時に客が感じることを、あなたはどこまで正しく分かるのでしょうか？

21頁の左図を見てください。これは「フォースの簡単さ」と「客がフリーチョイスと感じる程度」の相関関係について、100人のマジシャン達の考えを聞いてグラフにしたものです。

この図の縦軸は「その『客の選択の仕方』の場合に、マジシャンが客の選択に影響を与えることの難易度」、横軸は「客が感じるであろうフリー感の強さ」を表しますが、明らかな相関関係が見られます。つまり、マジシャンは難しいフォースほど客のフリー感は強いと思っている訳です。これはまた彼らの「そうあって欲しい」という思いも反映されているのです。

例えば、通常はクラシックフォースの方が「CROSS-CUT FORCE」よりも難しいと考えられていますが、マジシャンはデッキを広げて1枚取らせる方が、デッキをカットして1枚取らせるよりも難しく、客はフリー感が強いと考える訳です。ただ、ここでも「知識の呪い」や「エゴセントリックスバイアス」が影響しており、上記のマジシャンが考えた相関関係は、客にもフォースのやり方の同じ知識がある場合には成立するかもしれません。しかし、実際はそうなるとは限りません。例えば、「ONE-WAY」デッキを使ってのフォースは簡単ですが、客にフリー感はないでしょうか？そんなことはないと思います。

「MAGIC-LAB」では、数多くの一般の人達に20頁に例示したようないろいろなカードの選択方法を実際にやってもらい、どれがフリー感が強いかという調査をしました。その結果が21頁の右図です。左図のマジシャンの考えた「フリー感」を縦軸にとって、客が実際に感じた「フリー感」を横軸にとっています。

マジシャンの考えとやや似た傾向を見せていることは良いことですが、1点だけ注目に値することがあります。それはマジシャンならともかく、一般客であれば「心に思ったカードを言う」のが圧倒的に「フリーでフェアな選択」だと当然に考えそうなものですが、実際にはそう考えていないということです（「TABLE SPREAD」とほぼ同等、さらに「HAND SPREAD」の方が上にあります）。一般の人は、マジシャンが何かセリフなどで自分を誘導して特定のカードを言わせるかもしれないと思うのかも



しれません。心に最初に浮かんだカードの名前を言わせるよりも、裏向きにスプレッドされたカードの中から1枚選ばせる方が、客の「フリー感」は強かったのです。確かに「カードを言わせる」と、人々は「ハートのQ」や「スペードのA」、「スペードの9」などの特定のカードを言う傾向があると分かっているのです、完全なフリー感がないのかもしれない。

(訳注：マジシャンに対する調査結果の図で、マジシャン達が「NAME A CARD」を「TABLE SPREAD」や「HAND SPREAD」よりフォースとして易しいと考えている結果となっていますが、訳者個人的には同じように難しいと思うのですが、どうなのでしょう……。ただ、少なくとも一般客が「NAME A CARD」を一番「フリーでフェア」な選択方法と考えていない調査結果は面白いですね)

さらに調査では、カードを表向きにスプレッドした場合についても調べています。表向きのカードでフォースすることの難しさは、マジシャンなら分かると思いますが、一般の人はそうではないのです。表向きだと、配置されたカードのフェースに影響されると考えるのでしょうか、裏向きでの選択の方がフリー感があるとの調査結果が出ています。

上記の結果をさらに確認するために、別な実験をしました。そこでは、客の言ったカードだけがデッキの中でひっくり返る「BRAINWAVE」デッキを使いました。1つの実験では心に思ったカードを言わせ、もう1つでは裏向きにスプレッドされたカードから1枚取らせて行いました。スプレッドしたカードのフェースは見せていませんので、すべて同じカードの可能性もありました。被験者の選んだカードを「BRAINWAVE」デッキの中で現わして見せてから、どちらの選択方法によるほうが不思議であったかと聞いたところ、心に思ったカードを言おうが、実際にカードを抜き出そうが、結果は同じであったのです！このことは、多くのカードマジックのやり方を簡素化することに影響するでしょう。例えば、「ANY CARD AT ANY NUMBER」の場合にも、最終的には「ONE-WAY」フォーシングデッキを使っても、一般客の受け取り方は同じだということです。

## 「エゴセントリックバイアス」とミスディレクション

「エゴセントリックバイアス」は広い範囲で、人の判断に影響を与えます。ミスディレクションについても同様です。「MAGIC-LAB」では10年にわたって、マジシャンが客の注意をいかにしてそらすのかについて調査してきました。そのために24頁の一連の図で示されるトリックを創りました。ここでは、マジシャンがライターを落としてラッピングするのですが、通常のラッピングはテーブルのエッジを利用して、ライターを落とすのが見えないようにしますが、この実験のトリックではわざとライターが落ちるのがハッキリ見えるようにしています(2段目右端の図)。なぜ人は目の前で起こったことを見逃すのか、ということを知りたいのですが、ライブでこのトリックを見た人は10%しかライターの落下に気づきませんでした。パソコンの画面で見た人も40%しか気づきませんでした。これは、人の注意が向いていないと目の前で起こったことにも気づかない「意図せざる盲目」と言われる現象です。ですから、同じトリックを繰り返すことで、客は次第にやり方が見えてくるのです。我々の実験では、最初の回に「ライターの落下」を見つけた人は、他の多くの人が気づかなかったことをとても不思議がっていました。彼も「エゴセントリックバイアス」によって、他の人も当然見ていると思い込んでいたのです。つまり、他の人の状況を正しくとらえることが出来なかったのです。

マジシャンであるあなたは、この簡単なミスディレクショントリックに騙されないかもしれませんが、それは逆にあなたがこのトリックの観客(特に一般客)に与える影響を過小評価する可能性があること

を示すものでもあるのです。あなた自身の「騙されないぞ」という気持ちが、他の人が騙されるかどうかを正確に評価するのを妨げているかもしれません。

またマジックは様々な要素からなっており、ディセプティブ（騙される）なやり方のみならず、セリフ、マジシャンの個性、演技全体のドラマ性、審美的面なども、どれも重要なものです。ただ、我々は科学者なので、ドラマ性や審美性よりも「やり方」に係る分析、考察がメインになります。そして、その基本にあるのは、そのトリックの良し悪しは「あなたが判断するのではなく、観客が判断するのだ」ということであり、それをいかにして正確に知るかということです。様々なバイアスの存在を考慮に入れて、素直に謙虚に考えることです。DARREN BROWNが言ったように、「我々は皆、自分の頭の中に閉じ込められている」のであり、あなたのマジックを観客がどう見たかは、自分の頭の中から飛び出さなければ分かりません。

## 観客の頭の中に踏み込む

これまで、自分の演技を自分で見ているだけでは十分でなく、観客の思っていることを知る必要があることを見て来ました。ただ、人の考えていることを知るというのは簡単なことではなく、特にマジックに関してはそうです。あなたのトリックを観客が気に入ったのかどうかを、どうやって知のでしょうか？

ショーの後に観客と混じって、ショーの感想を聞くのも有効な手です。しかし心理学は、そうした感想には個人的なバイアスがかかり、全面的には信頼出来ないものもあることも教えています。時には、「面白くなかった」というのは失礼だとして、そう言わないケースもあるでしょう。それを回避して観客の本音を聞くために、毎回ショーの後に便所の個室にこもるマジシャンもいました。いずれにしても、収集したデータが完璧なものではないという事を踏まえて活用しましょう。

また別な情報収集スタイルとしては、ステージから観客の反応を見ておくというのも「あり」です。ノートに演目ごとの観客の反応、つまり拍手や笑い声などを記録しておくものです。それを見返して反省するのは良いですが、これもまたデータ自身が完璧に信頼出来るものではないかもしれません。例えば、拍手やスタンディングオベーションにしても、マジックからの驚きによるもの以外の社会的な要素（他人に合わせる）も入り得るからです。笑いにしても、我々は面白くても必ずしも笑うとは限りませんし、人が笑ったから笑うということもあるでしょう。ジョークが分からなかったけれども、皆が笑うので笑ったケースです。コメディに関する調査でも、客の笑いの量とおかしいと思う回数は比例していないのです。このように、マジックにおいて拍手と笑いは1つの判断基準とはなるでしょうが、あまりの驚きに客が啞然として動かなくなるケースもあるのです。

マジックの場合には、観客にダイレクトに演じたマジックのことを聞ければよいのですが、往々にしてそれはやり方に触れなければ出来ないことがあるのです。例えば、レモンをカップにロードするところが見えなかったか？とか、ポケットのふくらみは分からなかったか？といった具合です。また客はマジックをエンターテインメントとして楽しみに来たのであって、ショーの後であれこれ質問されるのを嫌がるかもしれません。しかし、まったく客の意見を聞かなかつたり、反応を探らないことは我々のショーを改善するのを妨げるものであり、これまでに述べた個人的バイアスによる信頼度の問題など踏まえたうえで参考にすることは有効です。

## 信頼出来るデータを集めるー科学的アプローチ

上記のような伝統的なデータ収集法によっても、自分のマジックの大きな改善につながるケースもあるでしょう。しかし、それには限界があります。そこで、観客の考えていることをデータとして科学的に収集することを考えてみたいと思います。

科学の進歩は我々の生活を変え、体と心の作用を解き明かしています。例えば、最近では神経細胞の動きを定量化して人の行動と心の動きの理解を進めようとしています。人の頭脳の働きの理解も進展しつつあります。それら化学の進歩は、しっかりした良いデータの収集に基づいており、マジックについても同じことが言えます。幸いなことに心理学はここ 100 年ほど人の思考を評価するツールの開発を進めてきており、それらツールはマジックの理解にも応用出来るものが多いのです。それらツールのいくつかを概観して、マジックにどう使えるかを考えたいと思います。

## あなたのマジックを評価する調査

質問を投げかけて情報を集めるというやり方は、人の「心や思考方法」を知るための強力な武器となります。1 つのやり方は、あなたに興味あることについて質問表を作り、それを回収して多くのデータを手に入れるという方法です。質問は「人はマジックの何が好きなのか？」や「好きなマジックのジャンルは何か？」といった、広いテーマでも限定的テーマでもかまいません。かつて JOSHUA JAY は心理学者と組んで、人々が「マジックについてどう思っているのか」についての質問表を作り、それを回収しました。その回答の中にはマジシャンが予想していなかったようなものもあったのです。例えば、人は「クローズアップで物が消える」よりも、「ステージで大きな物が消える」方が感銘を受けることも分かりました。

こうした調査票スタイルのやり方は、配布したり回収したりと時間と手間のかかる方法だと思われて来ましたが、現在ではインターネットの普及により簡単に出来るようになりました。調査者と回答者をつなぐインターネット上のプラットフォームも開設されています。わずかなコストで世界中から回答が得られるようになりました。あなたのマジックについてどう思うかを知りたければ、直接聞けば良いのです。多くの企業も、自分たちの製品についての消費者の意見を調査票の形で収集しています。しかし、実際にはマジックの世界ではこうしたことは滅多に行われませんでした。では、マジックの演技についてどのようにしたらよいのでしょうか。

調査を行う環境が大事です。ショーの間では出来ませんし、終わってからも観客は余韻に浸っていて、調査票に記入することは基本的に嫌います。したがって、あまり良いデータが集まらないこととなります。プロのマーケットリサーチャーは回答者に調査票に記入させるインセンティブを与えます。そこで、マジックの場合にもマジシャンが会場を確保して、無料であなたのショーに観客に来てもらうという手があります。ただし、無料の条件として用意された調査票の記入をお願いするのです。それにより、観客達のあなたのショーに対する本音の感想が聞けることとなります。そして、それはあなたのショーをより良いものにするのにとても役立つでしょう。実際にこの方法を取っているプロマジシャン達がいるのです。例えば、JUAN TAMARIZ は 70 年代から継続してこの調査法を採用しています。定期的に継続して自分のショーの評価を見直すことが大事です。

調査票を創ること自体も重要なことです。1 つのヒントを言えば、調査は匿名で行うことです。そうでないとなかなか本音は出て来ません。調査は客の正直な意見を聞くものであり、時にはあなたのエゴやプライドを傷つけるものさえフィードバックされます。でも反発するのではなく、それがあなたの演技

を改善するのに本当に役立つものだと悟るべきです。調査は匿名だとしても、その人の個人的な属性は知っておくべきです。年齢、性別、マジシャンかどうか、などです。マジシャンとノンマジシャンでは、同じ質問に対する回答に差が出るからであり、両方の意見を有難く頂戴しましょう。

次に重要なのが、当たり前ですが、どんな質問をするかです。誰も調査票に記入するのは嫌いなので、余計な質問は極力省いて、本当にあなたが知りたいことを聞くようにしましょう。そしてそれを何に使うのかも決めておきましょう。使うあてもない調査をして、客の時間を無駄にさせてはいけません。異なるトリック間での観客の感銘度の違いを見たいのか、あなたのショーを楽しんだ客とそうでない客の割合を見たいのか、あなたの演技を見てどんな感情が湧いたかを知りたいのか、などなどを事前に考えておきましょう。

そうは言っても、あなたの調査が完璧である必要はありません。おそらく調査を繰り返し行っていく中で、次第に進化、洗練されて行くと思います。以下に、あなたがすぐ使える、あるいはあなたのスタイルに変えて使える調査票のサンプルを挙げておきました。

## —以下省略—